



第 16 回: 連合静岡 (日本労働組合総連合会静岡県連合会)

「やрмаいか！」で動く、思いやり運動

— 時代のニーズを敏感にキャッチする静岡スタイル

連合静岡 事務局長 今泉 竜 氏

連合静岡 副事務局長 内山 千穂 氏

1. 「社会連帯活動」の位置づけ、推進の体制

【今泉】連合静岡では社会的弱者の方を救うことや、互いに支えあえる社会を目指して、運動を推進しています。社会連帯活動は国民運動局が中心となり、連合静岡全体で一丸となって進めています。

2. 連合静岡の取り組み

— 「社会連帯活動」について、具体的にどのような取り組みをしていますか。

【今泉】連合静岡では「地域に根ざす」ということを念頭に置いて活動しています。互いに支えあう社会を目指すなかで、いま一番困っている人や弱っている人はどこにいて、何を求めているのかを考えることが活動の起点です。もちろんフードバンクへの協力や社会的弱者の方への支援に向けた運動は行っていますが、一つの活動を継続するというよりは、そのとき一番困っている人々に対してのアプローチを主軸としているため、取組みが固定化していないことが特徴です。その時、その年のトレンドを受けつつ、今できることを考えながら、連合静岡独自

の「思いやり運動」として取り組んでいます。

(1) 思いやり運動第一弾

「マスク回収・配布の活動」

【内山】2020年、コロナ禍中に安倍政権が全世帯に布マスクを配布しました。当時、マスクが必要とされながらも、政府から配布された布マスクは使いづらいという声が多量に上がっていた一方で、医療機関や福祉施設などではマスクが不足していました。そこで「家にある使用しないマスク」を集めてマスクを必要としている人たちに届ける取り組みを、思いやり運動第一弾として提案しました。

— マスクを集めるにあたって、どのように組合員の方に情報発信をしたのでしょうか。

【内山】使わないマスクが家にあれば、ぜひ寄附してほしいということをいち早く伝えたかったので、新型コロナウイルス緊急対策本部ニュースを発行して迅速な情報発信に務めました。

【今泉】ニュースは適時発行し、構成組織代表者と地協代表者にメールにて展開しました。連合静岡の9地域協議会と32の構成組織それぞれ

れの事務局を中心に組合員の方への声かけをお願いしたところ、最終的に 19,812 枚の未使用のマスクが集まりました。集めたマスクは一次寄贈先として静岡県ボランティア協会に寄贈しました。

(2) 思いやり運動第二弾

「シトラスリボンの活動」

【内山】 マスク回収・配布の活動の次に展開したのがシトラスリボンの活動です。コロナ禍において、インターネット上を含め、デマ拡散や悪質な誹謗中傷が深刻化しました。だからこそ「誹謗中傷をせず思いやりを持って行動します」という明確な意思表示を大切にしようという思いが運動に繋がりました。

当時、連合長野が同様のピンバッジを作成していたことも後押しとなり、先んじてシトラスリボン運動を展開していた四国の大学に使用許可を得て、シトラスリボンのロゴをモチーフとした独自の寄付金付きピンバッジを作成しました。ピンバッジは、ひとつ 500 円で販売し収益分を「新型コロナウイルスに打ち勝つ静岡県民支え合い基金」に寄贈しました。最終的に約 150 万円の寄付金が集まり、県内の医療従事者支援を中心に妊婦支援や医療用防護服の生産体制構築に活用いただくことができました。このピンバッジは県庁の売店や駅のお土産店でも販売し、組織の枠を超えて運動を波及させることができました。

県庁の売店では来館者の方や職員の方が購入してくれましたし、JR の掛川駅では観光客の方も購入してくれたと聞きました。寄贈先からも「購入してくださる方の思いが伝わってきた」と言っていたら、私たちもやってよかったと思っています。



事務局長 今泉 竜氏
副事務局長 内山 千穂氏

(3) 思いやり運動第三弾

「ふじのくに福産品一人一品運動協力隊への参加」

【内山】 コロナ禍が落ち着きを見せ始めた 2022 年の夏、思いやり運動第三弾として始めたのが、「ふじのくに福産品一人一品運動協力隊」への参画です。

当時、新型コロナウイルスの影響により、県内で開催される多くのイベントが中止になったため、就労継続支援事業所で作られたクッキーやお茶、工芸品などの販路が絶たれ、障がい者雇用の維持が危ぶまれていました。そこで静岡県は就労継続支援事業所で作られた商品を「ふじのくに福産品」として県民に一人一品買ってもらおうという啓発事業をスタートし、連合静岡は県の事業に乗じる形で運動を展開しました。連合静岡が加盟組織に情報提供を行い、県に直接申し込んでもらう形にしたところ、県からは「情報がなければ購入しなかったと思われる層から多くの購入があった」と報告をいただきました。

県が実施する「ふじのくに福産品一人一品運動協力隊」は、現在は物品の購入だけでなく、福祉事業所に対する作業の発注も可能となっています。連合静岡としては、街頭活動で利用するチラシの折り込み作業依頼を行った他、機関

会議にて加盟組織に利用を呼び掛けるなど、継続して本事業への協力を行っています。

この運動に参加したことにより、県の窓口や就労継続支援事業所など、これまで接点が薄かった団体との連携が可能になり、またこれまで知ることのなかった考え方に触れることができ、非常に有意義な運動となりました。

(4) 思いやり運動第四弾

「お米一人一合運動」

【今泉】2024年には米価が値上がりし、生活困窮者がお米も買えないという社会情勢を受けて、思いやり運動第四弾「お米一人一合運動」を展開しました。

【内山】定期大会など多くの組合員を動員する機会を利用し、参加者に一人一合ずつお米を持参してもらい、県内の子ども食堂に寄贈するという運動です。

組合員を多く巻き込んで世論形成ができるような形にしたかったので、誰もが簡単に取組めて、かつ押しつけではなく、「何かしたいが何をしたらいいかわからない」方にも気軽に参画してもらえるような取組みをめざしました。何をどれだけ持ってきてほしいかを明確にすることで、より参加しやすくなったのではないかと考えています。集まったお米は、連合静岡の強みを活かして、主に推薦議員が連携を取っている子ども食堂に寄贈しました。

この頃から、思いやり運動という看板が組合員にも定着し、「思いやり運動」と言えば協力してくれる方が増えてきたように感じます。実際に「お米一人一合運動」でも多くの組合員がお米を持参してくれました。定期大会なら約300人、春闘集会であれば約1,000人の組合員が集まりますので、まさに連合静岡のスケールメリットを活かすことができた運動だったと思

います。寄贈先からも喜びとともに驚きの声をいただきました。

(5) 「アゴミサ・納言の誰でもラジオ」の スポンサー

【今泉】連合静岡では2024年の4月より、ふたりのドラッグクイーンがLGBTQ+など、主に性的マイノリティの方の多様な悩みに寄り添う「アゴミサ・納言の誰でもラジオ」というラジオ番組のスポンサーをしています。

スポンサーとなることに対して最初は戸惑う組合員がいたかもしれませんが、例えばLGBTQ+の当事者から相談があった際、自信を持って適切なアドバイスや会社への対応ができる労働組合は少数かもしれません。そこで、すべての悩みを私たちが個別に引き受けるのではなく、番組スポンサーを通して連合静岡も味方であることを示しつつ、心のよりどころとしてラジオ番組を活用してもらえば仲間がいることを感じてもらえるのではないかと考えました。今の時点で明確な効果があるか否かは正直なところわかりませんが、ラジオの聴取率はいいと聞いていますし、勇気づけられたという声も寄せられているそうです。

パーソナリティのお二人とも交流があり、連合静岡の執行委員会で挨拶をしていただいたこともあります。また、連合静岡の角山会長はラジオ番組に出演し、連合静岡の紹介をしました。

スポンサーとなったことによって、これまで社会のセーフティネットからこぼれ落ちてしまっている人々がいることを知るきっかけになりましたし、今後も連合静岡として多様な人の悩みに寄り添い、運動を進めていかないといけないと感じています。

(6) 連合静岡の風土

—いろいろな社会課題が出てくるたびに、その都度「何かできないか」と自然に案が出る風土が根付いているような印象を受けましたが、思いやり運動を行うにあたって意識していることはありますか？

【今泉】思いやり運動の背景には、静岡特有の「やらまいか精神」が深く根ざしているのではないかと感じています。「やらまいか」とは静岡弁で「とりあえずやってみよう。考えるばかりで行動しないのではなく、やってみてダメだったら変えればいい」という意味です。

「とりあえずやってみよう」という精神を持つ人が多いため、思いついて提案したことが運動として展開され、さらに組合員も協力してくれるのでここまで思いやり運動が続いてきたのではないかと思います。

また、思いやり運動が始まったきっかけはひとりの女性役員からの提案でした。地域の困りごとや時事課題をいち早く察知して『一人では難しくても、みんなで力を合わせれば何とかするのは？』という建設的で前向きな提案から、この思いやり運動がスタートしました。男性中心の労働運動界の中において、男性だけの視点では見落とされがちだった社会課題にスポットライトが当たり、思いやり運動が新たな運動として芽生えたのではないかと思います。

【内山】私は長年、男女平等やダイバーシティ、ワークライフバランスといった分野での運動に携わってきました。

これまで男性中心であった連合静岡の役員構成の中で、当初は自分の存在価値を示すためにどこか肩肘を張って発言していたこともあったかもしれません。でも私の発言が必ずしも女性を代表するものではありませんし、価値観や視点は性別問わず人それぞれです。

また性別だけではなく、世代別でも考え方や感じ方は異なってくるので、若手の発言に対しても頭から否定せず、なぜそういう考え方になるのかを組織全体で考えていくことで相乗効果が生まれるのではないかと考えました。強固な組織として発展していくためには、多様な視点を取り入れ、全員参加型で意見を出し合うことがとても大切だと思っています。

【今泉】現状、労働組合員の比率が低下しているということは、これまでの活動が必ずしもすべての労働者に響いているわけではないと考えられます。

日ごろから、労働組合員のための運動ではなく、すべての労働者・生活者へ視線を当て、新しい考え方を取り入れて、より多くの人を巻き込むための運動を考えていけば、個々に目の付け所の異なる意見が出てくるのではないのでしょうか。

連合＝政治団体という世間のイメージを変えるためにも、地道な連帯活動は必要不可欠です。連合静岡の20万人というスケールメリットを活かしてできることを今後も考えていきたいです。

3. 他の運動や、市民社会組織（以下、CSO）と連携して行われている取り組みがあればぜひお聞かせください。

【今泉】災害発生時には静岡県ボランティア協会と常に連携を図っています。能登半島地震の際には、協会を通じて穴水町へ支援に向かいました。以前、熱海市伊豆山の土砂災害に見舞われた際、県外から支援を受けた経験があります。災害時はお互い様の精神を大切に、できる限りの支援をしたいと思っています。

【内山】「ふじのくに福産品一人一品運動協力隊」と繋がる部分がありますが、就労継続支援事業

所の商品を紹介してくれる NPO と連携して、お弁当や飲料等を適正価格で発注するほか情報提供もしてもらっています。また、日ごろから女性会館や男女共同参画センターとも連携しており、センターが実施する男女共同参画や女性活躍に関するアンケート調査の際に、連合静岡のスケールメリットを活かして積極的に協力を申し出ています。アンケート調査の結果は、政策提言へ繋げるなど、連合静岡の活動にも活かしています。

【今泉】 連合静岡と連携する推薦議員からは、各課題に対するアドバイスや意見をもらっています。我々が持つ情報だけでは、どうしても地域の実情を見落とししてしまう可能性があるため、地方議員から得られる「地域にどのような方がいて、どこで誰が困っているか」という情報は、活動を進める上で不可欠な情報源です。

4. 今後の展望や課題感

【今泉】 今後の展望としては、2025 年 11 月より県内 9 つの地域協議会において、地域に根ざした新しい独自の社会貢献活動を企画・実行する取り組みを始めました。これまでも地協ごとに社会貢献活動に取り組んできましたが、組合

役員の任期が短いこともあり、どうしても例年通りの活動を繰り返す傾向にありましたが、それぞれの地協が独自の活動を行うことにより、地域に連合静岡という組織を知ってもらうきっかけになればと考えています。

これまで継続してきた活動を維持するだけでなく、今後の社会の変化を見通した連合静岡の在り方を模索していくほうがより有意義な活動になると感じています。新しい世代が持つ感性や知識を柔軟に取り入れて、伝統的な活動と新しい活動の両方を大切な軸とすることで、多様な価値観を運動に反映し、運動がさらに大きなうねりとなるよう進めていければと思っています。

組織概要

構成組織：32 産業別労働組合、9 地域協議会

組合員数：200,000 人（2026 年 1 月現在）

結 成：1989 年 12 月 22 日

URL:<https://www.rengo-shizuoka.jp/>

（インタビュー日：2025 年 11 月 13 日）

このインタビュー連載は、2024 年 5/6 月号よりスタートしました。地方連合会の連帯活動は、組織（地域）ごとに特色があり、多様な活動が展開されています。この活動に光をあて、地域の運動がどのように紡がれてきたのか、また、これからどのように展開していくのか、インタビューをつうじて（再）発見できればと考えています。